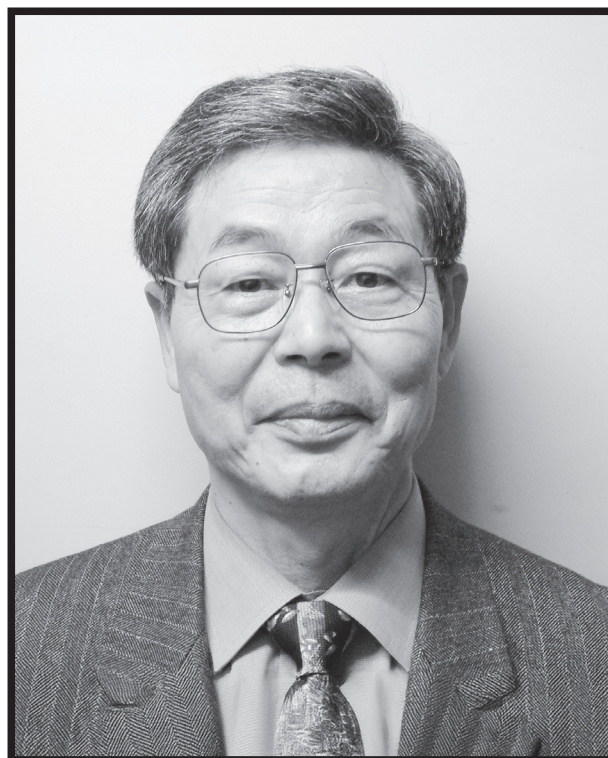


故 宮 村 實 晴 先 生
の ご 逝 去 を 悼 む



名古屋大学総合保健体育科学センター

センター長 石 田 浩 司

故 宮 村 實 晴 先 生

宮村實晴先生ご略歴

昭和15年 8 月15日	石川県生まれ
昭和38年 3 月25日	金沢大学教育学部卒業
昭和39年 3 月25日	金沢大学体育専攻科修了
昭和41年 3 月31日	東京大学大学院教育学研究科修士課程修了
昭和44年 3 月31日	同博士課程を単位取得満期退学
昭和44年 4 月 1日	金沢大学医学部助手に採用
昭和46年 3 月 2日	東京大学から教育学博士の学位を授与
昭和49年 4 月 1日	名古屋大学教養部助教授に採用
昭和50年 4 月 1日	名古屋大学総合保健体育科学センター助教授に配置換え
昭和58年11月16日	名古屋大学総合保健体育科学センター教授に就任
平成 3 年 4 月 1日	名古屋大学大学院医学研究科「健康増進運動科学」講座主任教授を兼任
平成16年 3 月31日	名古屋大学を定年退職（名誉教授に就任）
平成16年 4 月 1日	東海学園大学人間健康学部人間健康学科教授に就任 (平成20年 3 月31日まで)
平成16年 4 月 1日	東海学園大学人間健康学部人間健康学科長に就任 (平成17年 3 月31日まで)
平成20年 4 月 1日	東海学園大学人間健康学部特任教授に就任 (平成23年 3 月31日まで, のち名誉教授に就任)
平成24年 4 月 1日	金沢星稜大学人間科学部特任教授に就任 (平成26年 3 月31日まで)
令和 4 年 4 月29日	瑞宝中綬章を受章

名古屋大学名誉教授の宮村實晴先生が、去る令和7年9月17日、享年86でご逝去されました。先生は日本体力医学会の理事を1期（平成12～15年）務められ、また、体力医学会東海地方会では、平成8年の設立時

から令和3年まで、理事、副理事長、顧問を歴任されるなど、体力医学会の発展に多大に貢献されました。ここに先生のご功績と、在りし日のエピソードをご紹介申し上げます。追悼文とさせていただきます。

先生は、金沢大学教育学部の体育科でバレーボールの部活に励まれ、専攻科に進んだあと、研究の道を志し、昭和39年、設立間もない東京大学大学院教育学研究科体育学専攻（修士課程）に入学されました。同研究科では、日本の運動生理学の祖、猪飼道夫先生のご指導のもと、運動時の心拍出力の測定についての研究に取り組まれました。当時、疲労困憊に至る最大運動中に心拍出力を連続的に測定することは不可能とされていましたが、先生はアセチレン・炭酸ガス再呼吸法を用いて、日本で初めてこれに成功されました。そしてこの方法を様々な運動様式や環境条件、および様々な対象者に応用して、多数の論文を発表されました。東京大学では、猪飼門下で同じ時を過ごした矢部京之助先生、田口貞義先生、福永哲夫先生、金子公有先生たちとともに、お互いの実験の被検者を務めるなど、切磋琢磨しながら研究を進められました。これらの先生方が、日本の運動生理学・キネシオロジーの各分野におけるパイオニア・レジェンドであることは、広く知られているところです。

昭和44年に博士課程を単位取得満期退学された先生は、金沢大学医学部助手に採用され、第一生理学教室の本田良行助教授のもとで、心拍出力の研究に加え、呼吸の化学感受性や酸塩基平衡など、呼吸生理学の研究を進められました。このころの主な研究テーマは、呼吸の化学感受性（化学受容器反射）で、測定装置を自作され、安静や運動時、低酸素環境など様々な環境や、異なる対象グループ（例：海女）で比較する実験を精力的に実施されました。

先生は昭和49年4月、名古屋大学の教養部保健体育科の主任教授の松井秀治先生の招聘により、同大助教授に着任されました。名古屋大学では一般教育の体育実技と講義を担当され、実技ではバレーボールをはじめ、バスケットボール、野球、テニス、スキーなど多種目を退官するまで指導されました。また、先生は着任直後の昭和49年8月から1年間、文部省在外研究員（長期）として、オランダのナイメーヘン大学医学部生理学教室に海外留学されました。

名古屋に着任してからは、近隣の先生方とともに、呼吸の化学感受性や低酸素の実験を精力的に実施されました。そして、平成元年冬に2か月間、文部省在外研究員（短期）としてヨーロッパ諸国を訪問し、その途中、スイスのジュネーブ大学のCerretelli教授のもとで、低酸素が運動時換気亢進に及ぼす影響に関する実験を実施されました。その後、昭和62年に助手として採用された私を含む宮村研究室では、運動開始直後20秒間（Phase I）の換気亢進について、精力的に研究を進めました。先生は、対象者の足首に結んだ柔道の帯を検者が交互に20秒間だけ引っ張る、というシンプルな方法で受動的運動を行い、さらに中枢性の影響を除外するために睡眠時に受動的運動を行うなど、ユニークな着眼点で、運動と呼吸に関する研究の一大拠点を形成されました。

平成3年からは大学院医学研究科の協力講座の教授も兼任され、院生の指導にも当たられ、優秀な研究者の育成にも務められました。先生の業績には多数の論文（151編）に加え、著書（43編）、特に編集・監修に携わられた書籍が多く、各専門分野の若手に執筆の機会を与えるなど、若手研究者の活躍の場を広げることにも注力されました。

学会活動については、日本体力医学会の他、日本体育学会でも理事を務められました。さらに発起人の一人として平成5年に日本運動生理学会を発足させて理事を歴任され、平成15年に名古屋で開催された第11回大会では、大会長を務められました。また、先生は数々の業績と2度の欧州留学により、ヨーロッパとのつながりが強く、日本人で初めてEuropean Journal of Applied Physiologyの編集委員会委員（平成2～18年）や、ポーランドの医学系雑誌Medycyna SportowaのInternational Advisory Board（平成11～15年）を務められました。

先生の日本の体力科学への一番の貢献は、体力医学会大会の関連研究会である「呼吸研究会」の創設にあるといえます。運動と呼吸に関する研究上の課題や悩みをみんなで解決しようと、先生が音頭を取って昭和63年に関係者20名ほどが名古屋大学に集まったのをきっかけに、その後、毎年、体力医学会前日に研究会を開催することになり、令和7年に第37回を数えました。この会は非常にカジュアルで、呼吸に少しでも関係していれば発表を受け入れたり、若手の発表を歓迎したりと、「世話人」として会の代表である先生のお人柄が反映された場でした。ここから巣立った多くの研究者が、現在では日本のみならず世界の呼吸・循環・代謝分野を牽引する存在となっています。令和7年の立命館大学での体力医学会の関連研究会紹介企画で、私が先生の話を中心に呼吸研究会のあゆみを紹介する機会をいただきましたが、奇しくも先生が息を引き取られたのは、まさにその日でありました。

令和4年の春に瑞宝中綬章を受章されたあと、令和5年の春には、名古屋近辺で先生の指導を受けた8名ほどで、ささやかなお祝いの会を設けました。一線を退かれた後は、地域のボランティア活動をされているとお話でした。

今年の1月に奥様から私に手紙が届き、そこには先生が昨年9月17日に亡くなり、家族葬を済ませたと記されていました。慌てて奥様に電話をすると、主人からは何度も「誰にも言わないように」と言われていたので、誰にも知らせなかったとのこと。ご焼香させていただければとお願いいたしましたが、そのようなことも申し訳ありませんが、お断りしていますとのこと。直接のお別れは叶いませんでした。信念を貫かれた、まさに先生らしいご最期と存じます。

先生の優しい笑顔が忘れられません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

第96回日本体力医学会中国・四国地方会のご案内

期 日：令和8年6月27日(土)、28日(日)
会 場：土庄町総合会館（フレトピアホール）
（〒761-4101 香川県小豆郡土庄町甲267-78）

プログラム

1 日目：令和8年6月27日(土)

12時30分～13時00分 幹事会
13時00分～13時30分 受付
13時30分～13時35分 挨拶
13時35分～15時45分 研究発表（1）
16時00分～16時45分 特別講演

『講演タイトル：未定』

講師：小野寺 昇 先生（川崎医療福祉大学名誉教授、吉備国際大学保健福祉研究所）

19時00分～21時00分 情報交換会
会場：南国（土庄町甲1480-5（鹿島海水浴場近く））

2 日目：令和8年6月28日(日)

9時00分～9時15分 受付
9時15分～12時00分 研究発表（2）
12時00分～12時30分 総会・若手優秀発表賞表彰

※時間は、演題数により変更になる場合があります。

○学会参加・発表演題申し込み

地方会への参加申し込み・演題申し込みの締め切りは、**6月5日(金)**となります。下記の申込フォームから登録を行ってください。フォームでの申し込みが難しい場合は、下記お問い合わせ先のE-mailまでご連絡ください。

学会申込フォーム（Google フォーム）
<https://forms.gle/UfV3AWzSj8UVZoGq9>



学会参加費：

会 員：1,000円（不課税）
非会員：2,000円（10%消費税込み）
学生、院生：無 料

○予稿集原稿の提出

予稿集原稿の提出の締め切りは、**6月19日(金)**となります。下記お問い合わせ先のE-mailにてご提出ください。ご提出いただく原稿の様式は次の通りとなります。

- ・WordおよびPDFで作成したもの
- ・用紙はA4サイズ2枚、余白は上下左右2cm、タイトルは18ポイント、所属・氏名・本文は12ポイント
- ・発表者が複数の場合は、演者の前に○印を付けてください。

なお、添付されたWord書類はこちらで印刷します。印刷の都合上、こちらで若干の修正を加えさせていただきます。ご迷惑がございませんのでご了承ください。

学会参加、一般発表、予稿集原稿の送付先、問い合わせ等
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
吉備国際大学社会科学部スポーツ社会学科
高原皓全 宛 E-mail: takahara@kiui.ac.jp
TEL: 0866-22-9162（直通）

○一般発表について

- ・発表時間は10分、質疑応答4分の計14分間とします

（演題数によって変更有）。

- ・発表は、パソコンの画面映写とします。プロジェクター、HDMIケーブルは事務局にて準備します。
- ・ご自身のパソコンを持ち込まれる場合は、HDMIケーブルとご自身のパソコン接続等の作業につきましては発表者ご自身でお願いします。各種変換ケーブルは発表者をご持参ください。また、発表当日の接続確認と試写を必ずお願いいたします。

○学会会場

土庄町総合会館（フレトピアホール）
〒761-4101 香川県小豆郡土庄町甲267-78
<https://www.town.tonosho.kagawa.jp/gyosei/soshiki/shogai/shakaitaiiku/334.html>
お車でのアクセス
施設には駐車場（無料）がありますので、お車でお越し頂けます。

○情報交換会

居酒屋 南国
〒761-410 香川県小豆郡土庄町甲1480-5
<https://retty.me/area/PRE37/ARE262/SUB26201/100000633088/>

○宿泊施設

小豆島は観光地のため、学会会場および情報交換会場付近のホテルの空き状況については未定です。詳しくはインターネット等でお調べいただき各自で手配をお願いします。楽天トラベル・じゃらん等のホテル検索サイトでは出てこない宿泊施設情報が小豆島観光協会HPに掲載されています。詳細は観光協会HPをご確認ください。

小豆島観光協会

(<https://shodoshima.or.jp/sightseeing/?c=4>)

○健康運動指導士及び健康運動実践指導者の方へ

健康運動指導士および健康運動実践指導者の登録更新に必要な履修単位として、事務局での一括申請を実施しておりません。大会への参加後、個別認定審査のため、申請手続きを実施いただきますよう、お願いいたします。

○学会誌「体力科学」への掲載用原稿

学会誌「体力科学」への掲載用原稿は、地方会事務局がとりまとめ、学会誌編集事務局へ送付します。下記の提出原稿書式に従い、E-mailにて地方会事務局へお送りください。締め切りは、**7月10日(金)**となります。なお、筆頭著者が非学会員の場合、抄録掲載料が1演題あたり3,000円（10%消費税込）必要となります。掲載原稿送付先: jspfsm.chu4@gmail.com

（地方会事務局）

（提出原稿書式）

- 1) 原稿の1枚目から演題名、発表者名、所属名、本文の順にお書きください。
- 2) 900字以内になるよう作成してください（演題名、発表者名、所属名、本文を含む）。
- 3) 図表は認められません。

第7回日本体力医学会北九州地方会のご案内

テーマ：応用健康科学

日時：7月4日(土) 13時00分～15時30分

会場：オンライン開催（Zoomによるリアルタイム開催・オンデマンドなし）

参加費：無料 会員以外（大学院生・学部生など）も無料で参加可能

会長：江島弘晃

（長崎国際大学人間社会学部国際観光学科）

【プログラム】

1. 開会挨拶（13：00～13：05）

江島弘晃（長崎国際大学人間社会学部）

2. 基調講演（13：05～14：05）

高齢者に対する自体重筋力トレーニングの多施設介入研究

座長 中原雄一（久留米大学人間健康学部）

日本体力医学会学術委員会プロジェクトの背景と今後の展望（13：05～13：35）

演者：町田修一（順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科）

自体重筋力トレーニング介入研究の実際

（13：35～14：05）

演者：尾崎隼朗（東海学園大学スポーツ健康科学部）

休憩 14：05～14：10

3. シンポジウム（14：10～15：10）

骨格筋から読み解く老年医学と応用健康科学の未来

座長 江島弘晃（長崎国際大学人間社会学部）

高齢者における骨格筋の質的評価の意義と応用
（14：10～14：40）

演者：吉子彰人（中京大学教養教育研究院）

プロライフルは高齢者の呼吸筋トレーニングになり得るか（14：45～15：10）

演者：長津恒輝（長崎国際大学人間社会学部）

4. 総合討論（質疑応答・ディスカッション）

（15：10～15：25）

5. 閉会挨拶（15：25～15：30）

【参加要領】

学術集会にアクセスするURLなどの情報をお送りしますので、事前の参加登録をお願いします。以下のリンクからお申し込みください。

◆参加申し込み：

<https://forms.gle/rw5MDNELxRUqpAwz8>



◆参加登録期限：2026年6月29日(月) 17：00

※登録期限後、事前にアドレスを送付しますので当日の参加登録はできません。

◆お問い合わせ先：

長崎国際大学人間社会学部 江島弘晃

メールアドレス: tairyokukita7@gmail.com

編 集 後 記

体力科学第75巻3号が発刊の運びとなりました。本号には原著論文2編、教育講座1編に加えて、本学会に多大な功績を残された故 宮村實晴先生への追悼の記事が掲載されております。またJPFISMには1編のShort Reviewと3編のRegular Articleが掲載されております。ご覧いただき、新たな研究の契機としていただければ編集担当として嬉しく思います。

宮村實晴先生とは、1995年に韓国体育大学で開催されたKNUPE International Symposiumで一緒にさせていただきことを思い出します。当時、防衛医科大学で故 大野秀樹先生の下で研究をさせていただき、その成果を発表させていただくことになりました。私にとって、初めての海外での発表であり、緊張していたことを覚えています。ソウルでのホテルでは、毎晩、私たちの部屋を会場にお酒を酌み交わしており、その場に宮村先生も参加くださり、大野先生と宮村先生の研究談義を拝聴することができました。当時は、大学院生であり、研究における知識も自覚も不足していた私にとって、研究を仕事としてやっていくための自覚と研究の面白さを教えていただいたように思います。特に日常生活も研究に直結しており、今では問題になるかもしれませんが、

Work:Workバランスを学ばさせていただきました。

お二人の話の一つ一つを覚えているわけではありませんが、その研究活動の根幹として感じたのは、サイエンスは過去の歴史があって現在があり、そして私たちもその一部となって未来のサイエンスの糧となるということです。それぞれの論文での研究成果が未来の論文に記述されることで、サイエンスの歴史の一部になっていくことが重要です。現在、AIの能力が格段に進歩して、論文の文章そのものが洗練されてきています。情報を整理したり、文章を洗練させたりにAIを使うことについて私は賛成の立場です。ただし、その研究成果が歴史の一部であり、未来に受け継がれるものであれば、その研究での苦心や苦悩も受け継がれてほしいと感じています。論文がただ単なる研究成果の発表の場ではなく、客観性を保ちつつ、その研究における思いも伝わるものであれば素晴らしいのではないのでしょうか。私自身も、研究に関われる時間が短くなりつつありますが、先人たちの物事を明らかにしたいという情熱を受け継ぎ、次の世代に繋げていきたいと思います。

十枝内厚次

The Japanese Journal of Physical Fitness and Sports Medicine Vol.75, No.3

体 力 科 学 第 7 5 巻 第 3 号

令和 8 年 5 月 25 日 印 刷
令和 8 年 6 月 1 日 発 行

編集兼発行者
発 行 所

編 集 事 務 局

印 刷 所

後 藤 勝 正
一般社団法人日本体力医学会
〒112-0012 東京都文京区大塚5-3-13
RENEX Shin-Otsuka 3F 学会支援機構内
TEL: 03-5981-6015 FAX: 03-5981-6012
E-mail: jspfsm@asas-mail.jp
〒997-0854 山形県鶴岡市大淀川字洞合1-1
鶴岡印刷株式会社内
TEL: 0235-22-3120 FAX: 0235-22-3120
E-mail: hj-tairyoku@turuin.co.jp
〒997-0854 山形県鶴岡市大淀川字洞合1-1
鶴岡印刷株式会社